

[書 評]

コンスタン

ツヴェタン・トドロフ著

鈴木正昭

〈目 次〉 コンスタンの位置

生い立ち

政治思想

個人の時代

自由と平等

利害と道徳

揺れ動く心

真と善

コンスタンの位置

本書は1997年アシェット社から刊行された。著者のトドロフ氏はブルガリア出身の文学研究家で我が国でも1970年代以降かなり知られた存在である。最初は文学理論の研究者というイメージが強かったが、今日では氏の関心はモンテーニュ、ルソーらをはじめとする作家たちの思想史的研究にシフトしているように見受けられる。本書もそうした流れのなかにある著作で、その対象が『アドルフ』の作者として知られるバンジャマン・コンスタンなのである。

わが国では現在コンスタンの知名度はどの程度であろうか。文学と映画が若い人々の教養の中心を占めていた時代には相当程度の知名度を誇っていたものであるが、今日アンケート調査をおこなったならば、名前を聞いたことのある者でもせいぜい数パーセント、なにかその著作を読んだことのある者に至っては千人に一人にも満たないかもしれない。

こうした事情はコンスタンの祖国フランスでも似たようなものであるらしい。厳密に言えば、彼はスイスのローザンヌ生まれだったのでスイス人というべきかもしれない。しかし、各地を転々とする生涯を送ったのちフランスで長く暮らし生涯を閉じているのでフランスの作家といって差し支えないであろう。同じスイス生まれのルソーも今日スイスの思想家ではなく、フランスの思想家として扱われているからである。

著者はコンスタンの不遇に義憤を覚えていて、本書を「どういうわけでコンスタンはふさわしい地位をフランス文学史に占めていないのか」という「驚き」から開始している。彼こそ自由な民主主義について考察した最初の偉大な思想家ではないのか。宗教に関する広く深い思索をおこなったのではなかったか。明晰で皮肉な自伝作家ではなかったか。彼の「日記」は人間の魂のもっとも奥深くまで探りを入れたものではなかったか。『アドルフ』は非の打ちどころのない傑作ではないか。ゲーテ、プーシキン、スタンダール、

ユーゴーら同時代のもっとも優れた文学者に認められ、賞賛された作家ではなかったか。それにもかかわらず20世紀末の今日、彼はかろうじて忘却を免れてはいるにせよ、二流の作家のなかに組み入れられてしまった。そして、著者がコンスタンの膨大な著作中もっとも重要であると考えている宗教関係の著作物は入手不能な状態が続いている始末である。

コンスタンの不遇の原因を著者は今世紀思想界や文学界を風靡したマルクス主義の影響に帰している。コンスタンはいかにも歯切れが悪いのである。もう一つはコンスタンの主張する政治思想自体が今世紀において実現を見てしまったためである。さらに、コンスタンの活動が多岐にわたりすぎたため、彼をどこに分類していいのかわからないという点も不利に作用した。さらに、彼の著作の多くが未刊のまま放置され、彼の全貌は明らかにされなかった。彼のプライベートな著作の多くは今世紀半ばに、政治に関する基本的なテキストに至ってはじつに1980年代、90年代になってやっと陽の目を見たのだった。

さらに、上記のような外面的な理由以外により内的な原因があつて、それがコンスタンの真価を見えにくくしている、と著者は推定している。その第一のものはコンスタンのアンチ・ヒロイズムである。彼ほど自分の弱さを率直に認めた人はいなかったし、さりとしてその弱点をルソーのように誇ることもなかった。彼は自らが自律した人間でなく、他人に依存しないではいられない人間であることを素直に認めていた。こうした反英雄主義がコンスタンの不人気の一つの重要な原因ではないかと著者は考えているようである。確かに彼の小説の主人公は愚図で煮え切らない男という印象を与える。すかつとしてかっこいいナイスガイという具合に参らないのがコンスタンの主人公である。

それにたいして著者は、コンスタンこそ「現代的」という意味ではもっとも我々の身近な存在であると主張する。弱さを認めたという意味の感受性ばかりではなく、その思想においても彼こそもっとも我々に身近な存在である、というのである。

1767年生まれのコスタンが22歳のとき大革命が始まった。いわば彼は近代社会の誕生に立ち会った生き証人である。しかしながら、著者によればコスタンは19世紀、20世紀に猛威を振るう盲目的な物質主義、ニヒリズム、全体主義から自由だった。彼はつねに伝統的な唯心論からも「科学的な」唯物論からも等距離のところにいる。こうした選択が明晰さと惻隱の情との幸福な結合を可能にした、と著者は主張する。コスタンこそ自己にたいする仮借なき明晰さと他者にたいする感動と共感を一身に体現していたというのである。彼は一見美德にかなったかに見える行為の裏に潜む密かな利己的動機を暴き出すことのできるほど人間心理に通じていた。同時に、彼は人間の限界をもよくわきまえていたため人間嫌いにおちいることもなかった。彼は真と善とをともに求める人だった。彼は自分が無限への渴望と自らの有限性の意識に引き裂かれていることも、この分裂こそが現代人の真実であることもいち早く洞察していた。

一般的に理論と実践とは一人の人物のうちに同居しがたいものであるが、コスタンの場合はその稀な例だった、と著者は主張している。政治について語ることで自らの政治家としてのあり方を考察し、政治家としての生活を継続しながらその思想に変更を加えていくこと、情熱の人として自らの内的、文学的な著作のうちに苦い教訓を分泌し、それが次なる自らの愛情生活の変貌を促したという具合である。

コスタンの思想は自らの資質そのものから滲み出たもので、現代の我々のそれに近すぎるがゆえに、かえって意識されにくくなっているのだとも著者は語っている。コスタンの思想の透明さから思想を救い出して、それを読むことが本書を執筆した著者の目標である。

生い立ち

コスタンは1767年スイスのローザンヌに生まれた。コスタン家はユグノーであり、17世紀にフランスを去ってスイスに居を定めた。母はバン

ジャマンを生んで間もなくお産がもとで死亡した。25歳の若さだった。父親は職業軍人で、息子の誕生時には任務でオランダに滞在中だった。バンジャマンの父方母方の親戚は彼の養育をめぐる争った。当初は母方が子どもを引き取ることに成功したけれども、1772年即ちバンジャマンが5歳のときに父親は子どもを取り戻した。以後、子どもは幾人もの家庭教師に預けられることになる。彼はこれ以後は欧州の各国を転々として青春時代を過ごすことになった。1783年にはエジンバラ大学に籍を置いて2年間を当地で過ごした。その後大陸に戻り、スイスおよびパリに滞在した。彼の生涯に大きな影響を及ぼすことになるシャリエール夫人の面識を得たのもこのころのことである。1788年にはブランズヴィック公爵の侍従になった。彼はそこでミンナ・フォン・クラムという女性と知り合い、翌年結婚した。彼の歴史、宗教、政治など多岐にわたる著作活動が開始されたのもこのころのことだった。しかし、1793年には妻と別れてスイスに戻った。翌94年には彼の生涯にもっとも多くの影響を及ぼしたと思われるスタール夫人に出会った。夫人がネッケルの娘であることはあまりにも有名である。当時、彼女はスウェーデンの駐仏大使夫人だったが、コンスタンと知り合ったころは夫とは別居中であり、すでに多くの著作によって広く知られた存在だった。

著者はこのころまでをコンスタンの生涯の第一期と見なしている。スタール夫人との出会いがきっかけとなって第二の時期に入ったことは言うまでもない。この時期は1802年まで続く。夫人とはしばらくして同居し、97年には二人の間にアルベルチーナという娘が誕生した。彼は夫人の知的能力に深い敬意を払っていた。二人の思想的影響は相互的なものであったけれども、二人の愛情はほどなく冷めたようである。そうしたなかでスタール夫人はフランスを追放された。愛情の冷めていたコンスタンも彼女とともにドイツに滞在し、その間にゲーテ、シラー、シュレーゲル兄弟らの知遇を得た。1808年にはブランズヴィック時代に知り合ったシャルロット・フォン・ハルデンベルクという女性と結婚した。しかし、一方ではスタール夫人との交情も11年まで続いた。以後14年にナポレオンが没落するまでシャルロットとと

もにドイツに滞在した。このおおよそ10年間にわたるドイツ亡命中こそ彼の生涯で文学的、哲学的にはもっとも実りの多い時期だった。彼の主要な著作の大部分が着想されたのはこの地でだった。

14年にパリに戻ったコンスタンは再度政治の世界との接触を回復しようとする。高名なレカミエ夫人との恋愛事件もこのころ始まった。もっとも、これは一方的な恋で彼の片思いに終わった。百日天下になると彼はナポレオンに協力し、再び王政に戻るとそれに帰順した。15年にはシャルロットとともに英国に赴き、翌16年末にパリに戻り、以後は30年に死去するまでこの地を離れなかった。それ以後は感情面では平静な晩年を過ごすことができたようである。公人としては何度も代議士に選出された。政治家としての活躍は華々しいものがあり、当時の政治的な諸問題のほとんどすべてに関わりをもっていた。30年の7月革命は彼の主張に沿った政権が出現したことでもあり、彼は大いに面目を施したが、このときすでに病魔に蝕まれており、同年末に亡くなった。63歳というのは当時の平均寿命を考えればけっしてそれほど早世ではなかった。彼の葬儀には多くの会葬者が参列したといわれる。

彼の著作活動は多岐にわたっていて簡単に要約することは困難であるが、その多くは死後の刊行である。当時の人々にとり、コンスタンは政治についての著作のある政治家といった評価がむしろ一般的だった。彼の文学作品はあまり評価されず、その完全な形での出版は20世紀の中葉を待たなければならなかったし、生涯の大半を費やし文字どおり心血を注いだ宗教に関する著作に至ってはほとんどなんの反響もなかった、といった状態だったことは先に見たとおりである。

コンスタンが好んでいた言葉に「自然界ではすべてのものは支えあっている」というのがある。ところで生涯の要約で見たように、彼はたびたび政治的な立場を変更している。そのため彼は変節漢であるという批判が絶えなかった。この点は以前からコンスタンにたいしてなされた攻撃の中心となっていた。著者は彼の著作の大半に目を通すことから、こうした批判が根拠のな

いものであったとしている。確かにコンスタンは機敏な人ではあった。だが、機敏であることは無節操であることと同義ではない、というのが著者の主張である。著作の検証の結果、彼の思想は生涯不変だったと著者は語っているほどである。しかし、生涯をとおして思想的に不変であっても、状況ごとの判断においては変わりやすい人という印象を周囲の人々に与えてしまうことがありうるところが厄介なところである。そして、多くの人は外見や印象によって他人を判断しがちである。

コンスタンのこうした不変性を証明するのが本書を書いた著者の目論見である。それは新たな自伝を提示することでも、ある著作を詳細に分析することでもなく、彼の思想を歴史的コンテクストのなかで記述することでもない。著者の方法は、彼の活動の総体を概観してそこから全体の見取り図を読み取ることである。彼の豊かさと複雑さを考えるとそれしか方法がない、というのが著者の判断である。それは彼の著作ばかりでなく、政治家としてのコンスタン、恋多き人としてのコンスタンを一つの総体として捉えようという試みである。

コンスタンというと、我々は『アドルフ』などの印象から、己について大いに語ったわが国の私小説作家のような人物である、というイメージを抱きがちであるが、著者はそうした見方を退けている。回想録などでは彼はつねに周辺部にしか姿をあらわしてはいない、というのである。その点で彼の態度はモンテーニュやルソーとは対照的である、と著者は考えている。なぜなら、両先人は自らの生活や、自分という人間を公にされた書物の目的としたからである。コンスタンが両先輩のような選択肢を選ばなかったのは、自らについて公を対象に語られた文章にはどうしても虚栄心が伴うことが不可避的だからである。「私は苦しんでいる」と他人に語ることは苦しみそのものよりも強い喜びである。同情されるのは自尊心をくすぐることである。コンスタンはモンテーニュやルソーに劣らぬほどに自己を凝視しつづけた人であったが、それを公にすることを潔しとしなかったのである。

ところで、言語は万人に共通なものなので、いったん言語で表現されると

そこにはすでに他者が存在している，ということを彼はよく承知していた。したがって，他人に見せない日記も言語という他者を含んだ道具を用いて記述されている以上，そこにはすでに他者が存在する。まったく混じりけなしにものを認識すること自体，自己と対象の間に言語が介在してしまうから不可能であることを彼は十分にわきまえていた。

本書での著者のコンスタンの思想へのアプローチはいくつもの道を経由している。なぜなら，彼の思想は書かれた作品，実体験，文学的な著作，さまざまなきごとなど，いくつもの手段を用いて表現されているからである。

政治思想

著者によれば，コンスタンの政治思想は18世紀フランスのもっとも深い考察，すなわちモンテスキューとルソーのそれを総合し，変更を加えたものである。これら二人の先行者はよりよい政体の性格について考察を加えたが，もちろんその結果は異なったものになった。

モンテスキューにとって重要なのは権力の掌握主体の数ではなく，それがいかなる形で行使されるかであった。彼には権力はそれが無制限なものでさえなければ正当なのであった。権力は法によって制約されようが，別の権力によって制限されようがかまわないのである。モンテスキューの理想は政府が法に従うこと，また行政権，立法権，司法権が同一の行使主体の手に落ちないことだった。こうした条件を満たしているかぎり，政体は共和制であろうと王制であろうとかまわない。なぜなら，モンテスキューにとっては専制政体こそもっとも憎むべき政体だったからである。

ルソーにとって重要なのは自治である。つまり，ある行為がその主体の意志に基づくものであるか否かが重要なのである。あるいは，人々が自分たちの決めた法に基づいて暮らしているか否かが重要である。理性は外界のいかなるものにも左右されてはならない，というのがデカルトの考えであったが，著者によれば，ルソーの思想の基本的な姿勢はこのデカルトの要求を政治の

世界に転位したものである。ルソーの考えでは権力がどのようにして制度化されたかが重要であり、権力がどのように行使されるかは重要ではない。王制は伝統によって制度化されたものであるが、それは過去の不正の結果にすぎない。したがって、人民が自らそれに従うべく制定した法に基づいた支配のおこなわれる共和制だけが正当性をもっていることになる。

コンスタンは躊躇することなくルソーの要請を受け入れている。つまり、権力は人民の意志の表現でなければならないこと、よい政体とは民主主義のことである、という二点である。しかし、彼はこれだけでは満足せず、モンテスキューの思想をも継承し、権力はその成立の根拠が正当であるだけでは不十分であり、その行使の方法においても正当でなければならないと考えた。これは、人民起源の権力であっても無制限なものであってはならないという主張である。「この権威が自らの守備範囲を逸脱した場合にはそれは不法なものになる」。つまり、彼の主張は先行する両者が最良の政体の要件としていたものを統合したものである。

両者の統合としての彼の政治思想には、当然のこととして先輩たちにたいする批判も含まれている。ルソーにたいしては、政治的な自治が可能であると考えたとき、集団の自治は個人の自治と相反したものになることを失念してしまった、という批判である。確かに、大革命によって出現した政体は人民主権によるものであるから民主的ではあるが、恐怖政治が立証してしまったごとく専制政治になる可能性を残している。ルソー自身は大革命の前に死亡しているので、恐怖政治の出現に立ち会ってはいない。

この事実はルソーの推論の不十分さを証明しているとコンスタンは考えた。事態の展開を眺めていた彼は、人民主権が正当性のない王制よりも悪い政体になる可能性がありうることを即座に理解したのだった。「何でもできる人民は暴君以上に危険である」という考察は、大革命の成果に多くの人々が酔いしれていた時代の歴史認識としては非常に冴えたものだった、と筆者は考える。したがって彼は、ルソーのいわゆる一般意志でさえも犯すことのできない私的な領域の設定が不可欠であるという考えに導かれたのだった。

以上のことを別の視点から眺めると、コンスタンは社会と個人とを対立するものとして把握したということである。社会は個人に還元されず、両者がそれぞれ要求する原理は断絶している。ルソーのこうした誤謬の原因をコンスタンはルソーのシステムの抽象性に見ている。つまり、一般意志なるものを行使する主体はあくまでも単なる個人にすぎず、したがってあらゆる誤謬が可能であることをルソーは見落としていた、というのがコンスタンの指摘である。

一方、権力は法律と他の権力による制限を受けなければならないというモンテスキューの解決法もまたコンスタンにとっては不十分なものに思われた。つまり、権力が立法権、司法権、行政権という具合に単独の個人や組織に集中しない場合であっても、そのような制度の全体が私の領域にまで侵入してくるようなことがあれば、それはコンスタンにとってはどうも容認することのできない政体だったからである。モンテスキューはすべての権力を単一者に与えてはならないと考えたのであるが、コンスタンはそもそもすべての権力を与えること自体あってはならないことと考えていた。したがって彼は、いかなる権力も介入することのできない個人という領域を法的に設定すべきである、と主張したのである。

しかし、大革命の時代を生きたコンスタンは法というものが場合によっては暴君のごとく機能してしまうことを十分にわきまえていた。権力を掌握した権力者は恣意的な法律を制定しかねなかったのである。コンスタンはここで近代の自然権に思い至った。これはモンテスキューにも存在していたものの曖昧なままに放置されていたものである。考察の結果、ある法が自然権に背くのは以下の3点に要約されるという結論が得られた。それは、(1)遡及性、(2)同情の拒絶、(3)密告といった道徳に背いた命令、連帯責任の3点を法的に求めてはならないということである。

法がこれら3点に背いていない場合は、その法がたとえ多くの批判すべき点を含んでいても従うほうがいい、と彼は主張している。これは秩序は無秩序に勝ると彼が考えていたからである。しかし、そうでない場合には市民的

不服従は適法であるばかりではなく、義務でさえある。コンスタンの法にたいする考えの根本には、「不公平な法に支持を与えた人物には釈明の余地はない」というきびしさがあった。

積極的に評価できる法および権力の分割だけでは不十分な場合にはどうすればいいか。それには、すべての法律とすべての権力の及びうる範囲を述べたうえで、明言する基本法、即ち憲法を制定する以外にはない。

コンスタンは人民主権という民主主義の原則を考えついたわけでもないし、権力の制限という自由主義的な原則を考案したわけでもない。しかし、彼はそれらをはっきりと言明し、自らの大革命、帝政、王政復古の各時代の実際の経験と比較して、抽象的な概念に肉体を与えた。抽象的概念がいかなる結果を、ときには危険を内包しているかを彼は知悉していた。同時代の他の多くの思想家たちと比較して、著者はコンスタンの説が今日の我々から見てもっとも妥当なものだったと考えている。そうした点で著者は、彼こそフランスの自由民主主義の最初の理論家だった、と評価しているのである。

ところで、個人の自由は何から成り立っているのか。コンスタンのこの問題に関するもっとも簡単な定義は次のようなものである。「自由とは個人が行使する権利を保有し、社会がそれを妨げる権利を有しないもののことである」。コンスタンによれば、すべての人間の生活は二つの領域に分けられる。公的な領域と私的な領域である。自由とはこれら二つの領域を隔てる境界線のことである、というのが彼の理解するところだった。

彼の自由は次の四つからなる。行動の自由、確信の自由（宗教的自由）、表現の自由、肉体的な保証である。いずれにしても、コンスタンにとって政治において重要なのは個と多数の対立や王制と共和制の対立などではなく、権力が限られた権力であるか否かということだった。同様に宗教についても、彼は西欧の人間には珍しいことであるが一神教と多神教の違いにはたいした意義を認めなかった。むしろ、祭司的な宗教であるか否かこそが彼にとっては重要だった。なぜなら、祭司的な宗教は必然的に権力の集中を招き寄せるからである。

個人の時代

コンスタンが自らの生きた時代を個人の時代と呼び、他の時代と区別した。彼は集団が個人の行為を命令する時代が去り、個人が各自の人生を生き、自由を要求する時代になったことを確認する。さまざまな思想が入り乱れ、支配的な思想がないのは混乱に見えるけれども、コンスタンによればそれはよいことなのである。「人々が嘆いている知的な無政府状態は私には知性の大きな進歩に見える」と語っているほどである。なぜなら、真理を探究する自由が権威によって保証されていた真理に取って代わったからである。こうしたコンスタンの理解は著者トドロフ氏のそれでもあるようであるが、我々自身の生きるこの世紀末の支配的な思想の不在も同じように慶賀すべき事態なのであろうか、それとも嘆かわしい事態なのであろうか。いろいろ考えさせられる言葉である。

時代の制約からコンスタンが個人と社会をつねに対立関係において把握しているのは致し方のないことではあるが、このあたりも20世紀末に生きている我々にはやや図式的すぎるように見えてしまう点は致し方のないところである。社会は個人の私的な空間を支配しようとし、個人はそれを守るため戦わなければならないというコンスタンの否定的な社会観を、おそらくは彼の政治思想の盲点であろう、と著者は考えている。大革命や王による専制政治により痛めつけられたために、コンスタンは社会は個人にとり恩恵を与えるものでもありうるということを考えられないのだ、と著者は判断しているようである。他の個人から危害を加えられたとき、社会はその制度により個人を守る盾にならないであろうか。社会が個人の弱さを守るばかりではなく、その安楽に貢献するからこそ個人の成熟も可能になるのではないか。それに私的な世界のみで極限された生活が想像しうる最良の人生と云うのであろうか、という疑問を著者は抱いているようである。

『政治学原理』において、コンスタンは古代人の自由と現代人の自由の比

較をおこなった。彼によれば両者には五つの大きな相違が存在する。現代人は個人の自由を尊重するのにたいし、古代人は自らの所属する都市国家の政府に積極的に参加する。現代人が余暇を好むのにたいし、古代人は戦争をより好む。古代人が栄光を好むのにたいし、現代人は快樂をより好み、古代人の勝利にたいし、現代人は略奪をより好む。現代人のほうがより思いやりに富み、古代人のほうがより毅然としている。最後に、現代人のほうがより明敏であるが、古代人のもっていた情熱に欠けている。

古代人のほうがすべてにわたって全面的な確信をもっていたのだが、現代人はすべてを疑い、何かをする前から疲れていて、自らの制度の力を信じていない。「家庭の幸福が大きな公の利害に取って代わってしまった」。こうして見てくると古代人のほうが優れているように見えてしまうけれども、コンスタンは古代風の自由の再興を望むルソーの『民約論』での主張には反対だった。彼は現代の短所に自覚的でありながらも現代の擁護者なのである。

しかし、彼は単なる現代の擁護者には止まらなかった。現代の病巣の存在が絶えず彼を不安に陥れようと虎視眈々と狙っていたからである。余暇や受け身的な楽しみが幸福への最短の道であるとは彼には思えなかった。確かに、脅迫されるよりは余暇のほうがましであることは間違いがないけれども、余暇は倦怠を招きがちである。さらには、幸福だけが人間の目指す唯一の目標であるかどうかも彼には確信がもてなかった。彼によれば、快樂による喜びは人間の動物的側面に対応しており、快樂だけでは人生に意味を、即ち目的を与えることはできない。そして、その目的こそ人間が探し求めているものなのである。それは、コンスタンの語彙においては市民としての自由ばかりではなく古代人の政治的自由にも裏づけられなければならないし、快樂の喜びだけでなく道徳的な向上にも裏づけられなければならない。

快樂が満足されるためには社会の秩序が保たれるだけで十分である。しかしながら、社会の目的はただ秩序を保つだけということはいえない。秩序を保つだけであれば、それは人間が蜜蜂なみの生き物ということになってしまう。こうしたたとえが突飛でないほど、当時の人々にとっては物質的な産

物をもたらさないものはすべて精神の遊戯であり、時間の浪費であるという考えが当たり前のものだった。

これがコンスタンの希求する自由と相反するものであることは言うまでもない。目的、関心、希望の喪失は人生を浅薄なものにしてしまう。自己のみにこだわることは輝きを失い、色褪せた印象を与える。『アドルフ』の放棄された序文で、コンスタンは自分はこの作品で「我々の時代の精神的な病の一つ、即ち疲労感、不安、力の不足、分析癖を描こうとした。これはあらゆる感情の傍らに下心を伴わせ、そのことにより感情が生まれたとたんにそれを色褪せたものにしてしまう」と述べている。こうした衰弱はコンスタンの見るところ愛情だけでなく、宗教、政治の世界でも同様に見受けられるのだった。

そして、こうした衰弱こそ自由を危うくするものに他ならなかった。なぜなら、自由を維持するにはある程度の政治的な自由が必要なのであるが、各自が自己にばかりかまけていると、専制君主が権力を掌握して自由が失われるかもしれないからである。いったんそうってしまった場合、個人は自らにかまける自由を喪失してしまう。自らにのみかまけている人はそうすることを尊重し、保護してくれる社会が存在してそれがはじめて可能なのだということを忘れていたのである。同様に、人は自らの快樂にのみ浸っていると公的なできごとに関心を失い、他人の不幸を無視しようとする。そうできるのは自分の幸福が公の幸福に依存していることを忘れているからだ。

「人々が祖国の大義を放棄したのは、娘の持参金を危うくしたくないという利害がそのように望んだからに他ならない」。しかし、祖国が炎に包まれているときに、娘の持参金が無事であることはありえないことである。こう言って彼は公にたいして無関心な態度を取り、ただ嵐の過ぎ去るのを待つ態度にはきびしい批判を投げつけている。大革命後の近代社会の成立と同時に、彼はその社会のもっとも初期の批判者になったのである。

彼のこうした態度は同時代の二つの支配的な思潮から彼を分け隔てること

になった。ボナールとかトクヴィルといった保守主義者とは異なり、彼はこの大きな変革自体には反対ではなかった。彼は頑ななまでの近代人である。しかし、彼は近代社会の成立とともに浮上してきた物質主義、個人主義、力強さの喪失という自らの存立を危うくする可能性のある脅威にたいしては、ただちにその危険を察知してそれらを分析し、それらを免れる手だてを考察したのである。そして、この姿勢は終生変わることがなかった。1796年の初めての政治についてのパンフレットから晩年の『宗教について』に至るまで、彼は個人の領域にのみ閉じこもり公にたいして無関心になることへの警告を発しつづけた。我々には個人を越えた何かが必要である。もし我々が私的な世界のみを固執しつづければ、その私的な世界を保持することさえも覚束なくなるだろう。だから公的精神、政治的な自由は維持されなければならないのである。

公的な活動、意志、自尊心という政治的社会的な世界、愛情という内輪の生活、見えるものが見えないものと結びつく宗教、これらにのしかかる近代に特有の脅威がどのようなものかを理解すること、近代の特性を失うことなく脅威を取り除くこと、これがコンスタンを終生駆り立てたのである、と著者は語っている。

自由と平等

コンスタンの思想を以上のように要約した著者は次の段階としてその検証にとりかかる。それはコンスタンの警告する危険を見つめ、彼の薦める対策の適否を検証するためである。その第一段階は近代人の自由の問題である。彼の出发点は、社会ではすべてのものが支えあっているというモンテスキュー譲りの思考法である。したがって、彼の考えではある国民の状況および性格から導き出されたものであるかぎり、あらゆるものはよきものと承認されることになる。

制度や世論はそれらが形成される時間や場所に制約されるもので、この決

定論を克服することは不可能である、とコンスタンは考えていた。こうした決定論は19世紀末には常識になるが、コンスタンが執筆活動をおこなっていた19世紀初頭においては新奇な考えであった、と著者は述べている。意識することがなくとも人は自分の生きている時代の精神の特徴を備えてしまうものである。

作家は自らのうちに自らの語る思想の源泉があり、自らの思想によって同時代の人々に影響を及ぼすことができると考えがちであるが、これは錯覚である、とコンスタンは考えていた。「作家は支配的な世論を伝達するための手段にすぎない。世論と同じ意見を持ち、それを忠実に表現することこそ作家の成功を確実にする」あるいは「我々を取り囲む環境の影響は我々自身の一部分になっている。それらは我々の存在と一体化しており、我々のあらゆる場所に深く根づいている」。

ところが、こうした決定論にもかかわらず、コンスタンは平等ということ重要な価値であると考えていた。彼の時代には人々はいまだ制度的には不平等な状態に置かれていた。それにもかかわらず、人間は心の底ではすべての人が同じように扱われるべきであると考えた生き物である、と考えられていた。したがって、コンスタンにとって「正義とは法の力によって与えられた平等に他ならない」という結論が導き出されるのは当然の帰結だった。もちろん、それはすべての人が同じ処遇を受けることを意味するわけではなく、すべての人が同一の原理によって判断されることを意味している。

こうした平等が普遍的で永遠の価値であるならば、それは人が異なった政体や制度を判断する道具を手に入れたことを意味する。そうになると人は過去をも裁くことが可能になるのだが、これはコンスタンが別のところで語っていたことと矛盾しないであろうか。「私は歴史にたいする敬意から不正のみは除外する」と彼は語っているけれども、これは大きな例外を認めることにならないであろうか。しかし、彼にとっては人類の完全化の可能性は平等を志向することであり、自由という価値もまた平等に近づくための手段なのであった。

したがって、コンスタンにとって平等は一般的な歴史主義を超越するけれども、人は不完全な状態から完成を目指すという歴史的な感覚をもつべきものであった。つまり、コンスタンは我々に平等が普遍的な価値であることを主張するだけでは満足できず、完成に向かっていることが現実であると信じたいのである。彼はこの点でコンドルセやレッシングの弟子だった。

こうした進歩にたいする信念を、著者のトドロフ氏はコンスタンの思想のもっとも非理性的な部分であり信仰であると呼んでいる。そして、もし完成への道を歩むことが既定の事実であれば、そのために努力をはらう必要があるだろうか、と問いかけてもいる。そして、こうしたコンスタンを決定論者であると呼んでいる。

しかし、コンスタンもこうした自説の矛盾に無意識だったわけではない。彼の思想は自由に根拠を置く普遍的な人間を信じることと、さまざまな社会の進歩と社会的な圧力を考慮するという二つの要求を関連づけることだった。それは別の言い方をすれば、すべては変化していても何か変わらざるものも存在することを認めることである。人間は必ず社会生活を営むのであるが、そこには現実があり、もう一方には理想、即ち道德がある。それでこそ人間は人間なのだコンスタンは考えていた、と著者は主張する。その例としてコンスタンは宗教の形式は時代により地域によりまちまちであるが、その実質は不変であるとしている。

これまで述べたことを要約すると、彼は唯一の教義に執着する人ではなく、二つの教義を承認することから出発している。そして、彼が求めていることはそれらを和解させることではなく、有機的に関連づけることである。それはルソーの原理をモンテスキューのそれに置きかえることでも、その逆でもない。それはいかにして両者と共存するかを模索することであり、人民主権と個人の自由をなぜ、そしていかにして持ち出さなければならないかを模索することである。著者によれば、こうした対立概念のいずれかを選び、もう一方を捨てるのではなく、両者を同時に考察するのがコンスタンのコンスタンたる所以なのである。

ところで、コンスタンにとって政府のもつ権限はそれがその限界を逸脱しないかぎり完全に正当なものだった。したがって、「できるだけ小さな政府にしよう」とか「政府は必要悪である」という言葉がコンスタンの口から出ることにはなかった。それどころか、彼にとって権限を逸脱しないかぎり政府はよきものであり、できるかぎり強力でなければならなかった。「政府は罪人にとってだけは悪であるが、罪人にとって悪であるのはよいことなのだ」というのが彼の確信だった。

利害と道徳

私的なものであれ、公的なものであれ、人間の行為の大きな動機は利害である。若いころのコンスタンは自らをヘルヴェシウスの弟子であると考えていた。ヘルヴェシウスは利害を中心に据えて自らの思想を構築した人である。一般意志は共通の利害によって導かれるものであるが、それはまた個人の利害の組み合わせでもある。コンスタンはいわゆる美辞麗句や難解な専門用語に酔う人ではなかった。政治の機関が堅固なものであるためには、それが個々の利害に応じたものでなければならない、と彼は考えた。「こうした原理を保障するのは治めるものと治められるものの利害、およびこの利害の産物たる公共精神である」。これはコンスタンの終生を貫いた信念だった。

個々の利害を尊重することはそれぞれの尊厳を尊重することと同義である、というのが彼の確信だった。ただし、ベンサムや功利主義の著作に親しむようになって以来、彼が利害という動機に制限を設けることになったのも確かである。ここで問題になるのは利害という言葉の定義であるが、学者のなかにはあまりにも広い意味をもたせすぎたために利害をめぐる議論がかみ合わなくなるケースが多々見られた。彼は利害を自己のエゴイズムを直接利するもの、という意味で用いている。そのように利害を定義したうえで、彼は二つの側面から利害にのみ重きを置く議論に批判を加えた。それは道徳的な側面からと事実という側面からである。利害のみが人間を支配していると

ということになれば、道徳というものの存在する余地はなくなってしまうであろう。しかし、そのような結論を出すことは危険であろう。というのは、人間の自己イメージはその人物の行動を支配するからである。しかし、その議論の採用によって好ましからざる結果が^{しよったい}出来ることのみを理由にそれを放棄することはできないであろう。なぜなら、原理というものは元来その有効性によって判断されるものだからである。

そして、宗教的感情、愛、献身などを挙げて、利害のみでは人間の行為のすべてを説明することはできないと主張している。それではこうした利害を超越した行為の根拠は何であるのか、と問いかけたうえで、彼は人間においては観念が感覚に勝っているからであると考えた。たとえば未来という非現実のために現在を犠牲にして頑張るというのも、そのように考えれば納得がいくであろう。

同様に、人間の相互依存性からも利害のみですべてを説明しつくすことは成り立たないことがわかるであろう。これは人間が時間に属する存在、即ち有限な存在であるということでもある。人間が無限に生きるものであれば最大限利害を満足させるということもありうるであろうが、死という現実により制約される。死という意識が利害の比類なき支配を不可能にするのである。さらに、すべての人からまったく孤立した人間を想定することも困難であろう。したがって、人間は二つの超越、すなわち死の自覚から生ずる時間的な超越、および人の社会性に基礎を置く空間的な超越により制約された存在である。

以上のような次第であるから、利害こそすべて、という考えはそれほど猛威を振ったわけではないが、同時代はナポレオンという非常に大きな典型をもった、というのがコンスタンの見解である。彼によれば、ナポレオンとは「人格化された計算」であり、「人間は自己の利害のみに忠実で、力にしか服従せず、軽蔑にしか値しない」と考える人間である。もっとも、こうした考えはナポレオンの独創でもなんでもなく18世紀の絶対王政以来のものである。そして、人民がこうした専制君主たちにこびへつらって、いわば共

犯者としてこの制度を支えてきたこともコンスタンは十分に承知していた。こうした統治形態の根底にあるのが人間を利害の支配下に置かれた存在であると考えた哲学理論であることも彼は十分に理解していた。

それではコンスタン自身の哲学はといえば、それは「自由」という語の二つの意味が隠しもつ二つの反対意見によって定義される、と著者は考えている。というのは、コンスタンは各人が恣意的な伝統に盲目的に服従することを拒否し、自己の生活を選ぶ権利をもつという考えの熱烈な支持者だった。しかし、他方では啓蒙主義の物質主義に由来し、勝利を収めつつあった科学的な精神に支持された決定論にも反対だった。こうしたコンスタンの姿勢を著者は、つねに左翼からも右翼からも攻撃されながら、それらすべての敵から自由を守るユマニストのそれであるとしている。

揺れ動く心

著者は以上のようにコンスタンの思想を要約してみせたうえで、一般の思想家とコンスタンの大きな相違点として、後者が思索の人に安住できない行動の人でもあった点を挙げている。事実、彼は1795年から1802年まで、そして14年から15年にかけて、さらには17年から彼自身の死の年である30年まで政治の世界に身を投じた。ところで先にも見たように、この政治家としてのコンスタンについては、すでに生前から、そして死後もオポルチュニスト（日和見主義者）であるという非難が絶えなかった。その点に関して著者は、それはコンスタンが党派の人でなく、論理の人であったからであるとして弁護している。つまり、彼はさまざまな君主や政体に仕えただけでも、それは自らの主義を政権に生かすためであったというのである。彼の生涯を辿ってみれば、彼が自らの信条を曲げたことはなかったのであるから彼は変節漢ではない、という著者の主張はそれなりに説得力があることは認めざるを得ないであろう。

しかし、自らの所属する集団に忠節を励み、そのなかで階段を一つひとつ

上っていくように出世していく日本的システムのなかでは、この主張は同意を得ることは比較的困難であるかもしれない。そして西欧、この場合はフランスにおいてさえも、やはり集団のもつ束縛力というものも相当に大きなものがあつたものと思われる。それでなければ、彼が生前も死後もこれほど非難を浴びることはなかつたであろう。彼我の相違を個人主義と集団主義という対立の枠組みのなかでのみ理解することには無理があるかもしれない。

いずれにせよ、コンスタンの政治的立場はフランス語ではサントリスト(中道派)と呼ばれる。いかにも足して二で割つたような呼称ではあるが、コンスタン自身にとっては妥協を廃したぎりぎりの立場であつたと思われる。彼が政治に求めたものは恐怖政治を伴わない革命、個人の自由を侵すことのない人民主権であるが、そのためには革命を支持しながら、しかも革命を恐怖政治にまで押し進めないことが必要不可欠だった。

目まぐるしいばかりの変身は彼自身の主張を守るためであり、生涯をとおしてみるとその主張には矛盾するところはない、と著者は判定している。したがって、党派的にはなく、哲学的観点からの判断が必要であることも付け加えられている。しかし、著者はこの分かりにくさがコンスタンの不人気の一因でもあることを認めている。世のなかには単純な答えしか認めない人も少なからず存在するからである。王政復古時代、コンスタンはアンシャンレジームの復興を願うユルトラ派とも、ナポレオンに心酔する人々やサン・シモン派の支持者たちとも戦わなければならなかつた。彼の宗教論は物質主義者には宗教的にすぎ、信心深い人々には不信心に見えたからである。

もう一つコンスタンの政治的立場を分かりにくくしているのがナポレオンとの関係である。1799年、彼は政治的に積極的な役割を果たすことを願い、シェイエースの推薦のおかげで法制審議院のメンバーになる。ここは法律制定の準備をする場所であるが、ここで彼は早速ナポレオンの野望を封じるためあらゆる手だてをつくしたため、ナポレオンの怒りをかい、2年後に辞任に追い込まれた。次の接触は百日天下の時期である。ナポレオンの北上に彼もまた恐れおののいた。なぜならば、専制的な帝政よりも穏やかな立憲王制

のほうが彼にとってははるかに好ましかったからだ。そこで彼は反ナポレオンの一文を草した。しかし、それから2週間後には彼はナポレオンのために憲法の前案を作成していた。さらに3ヶ月後にはフランスに帰還したルイ18世に許しを乞うていた。

こうしたコンスタンの目まぐるしい変身にたいし、著者はきわめて寛大で、それは彼が党派にではなく原理に忠実だったからである、という説明を繰り返している。1799年にも1815年にも彼は権力の懐に飛び込みはしたが、そこで権力に奉仕するのではなく、自らの信念を法律のなかに活かそうとした、というのである。おそらくそのとおりなのであろう。彼は人間の同一性への不信から理念の不変性を行動の規範とした。だから、成文法であればそれを公布する人間の名はルイであろうとナポレオンであろうとかまわなかった、と著者は考えているのである。

もっとも、著者も権力から離れていた時期のほうが彼に似つかわしいと考えている。コンスタンの理想とするところは、古代のように公的生活とも積極的にかかわりながら、権力の介入から自由な私的領域をもつことを可能にする社会の仕組みをつくることだった。そしてその公的な参加とは、コンスタンの場合には自らの意見を新聞や書物という形で公にすることであり、もう一つは議会で自らの見解を開陳することに集約された。古代の民主制ではポリスの規模が小さかったため直接民主制が可能であったが、近代になると国家の規模の拡大のため不可能になった。新聞や書物はその空隙を埋めるため登場した。後者については、彼は晩年の1819年から22年にかけてと24年から死去の年(30年)まで代議士として議会で議席をもっていた。

以上に見てきたように、公的な分野はコンスタンの生涯の重要な地位を占めているのだが、彼自身は親しい者、愛する者に囲まれて暮らす私的な部分のほうがより重要であると考えていた。むしろ、私的世界を守るために公的な世界がある、と考えていたのではないかと思われる。他人にたいしては危害を及ぼさないことが大切で、あとは必要な場合に援助の手を差し伸べればそれで十分だと彼は考えていた。

コンスタンの母は彼を産むと同時に産がもとで亡くなった。これが彼の心理的外傷になったと著者は語っている。これは一見ルソーの場合に酷似している。しかし、著者によれば両者は似て非なるものであるという。ルソーの場合には愛情深い父親がいたし、それ以外にも彼の世話を焼く人が安定的に存在していた。それに反し、コンスタンの場合、父親は職業軍人で郷里を遠く離れた土地に赴任していた。子どもが少し大きくなると親戚から取り戻して家庭教師をつけたが、父親の気分次第でたびたび別の家庭教師に変えられた。最後には若い家政婦に預けられたが、それは父親自身の愛人だった。こうした幼年期の生い立ちから、著者は次のことだけは確実に言えるとしている。それは、彼が女性にたいし母親の異常な死によって生じた空白を埋めることを一方で求めながら、もう一方では自分を捨てた女性を処罰しようとする衝動を押さえることができなかった点である。彼が女性を愛したのは彼女と別れるためであり、また自分が女性を必要としないことを自らにも彼女にも証明するためだった。こうした幼年期のため、コンスタンは自らを信頼できず、自らを好きになれず、自らの存在が必要とされていることや自らの実際の価値に確信がもてなかったのだ、と著者は主張している。「私はまったく現実の存在ではない」とか、「私はときどき自分がまだ生きているかどうか知ろうと自分の体に触ってみる」という言葉を彼は残している。また、幾度か自殺未遂事件を引き起こしたり、決闘したりして自らの生命に決着をつけようとしたこともあった。おそらく今日であれば精神医学の対象になるような症状を呈していたに違いない。そうした自己の心もとなさこそ、彼が外部によって認知されることに執着した根本原因だったのではないかと著者は推理している。外部の認知を得ることで、自己の生存が確認され、自分の長所にたいする自信を与えられたのである。もちろん、それが得られたからといって、それは彼を必ずしも幸福にしてくれたわけではなかった。

こうしたコンスタンではあったが、50歳ごろから死に至るまでの後半生では、精神的に安定を得て、それまでよりは幸福な時間を過ごすことができた、と著者は考えている。『私的な日記』が後半生では書かれなくなった理

由を、著者はコンスタンが精神的な安定を得て、日記をつける必要がなくなったためであろう、と推定している。

ところで、主体は一人だけで生きているわけではない。それは必ず「汝」と「彼ら」とを伴っている。そして、完全なエゴイズムは悪である前に不可能である。そして、こうした事実が個人的な利害こそ第一義的な意味をもつと考える思想家たちには忘却されているのだ、とコンスタンは信じていた。なぜならば、人間は元来が社会を内在させている生き物であり、社会とは他人の視線に晒された場所である以上、100パーセントエゴイズムで生きていくことなどできない相談だからである。そして、そのような場所では人は与えたものしか得ることはできないし、多く与えた者ほど豊かになるからである。

さらに、「彼ら」すなわち第三者、世論の存在がある。ルソーも人間が第三者の視線を自覚したときに人が人間になることを発見したのであるが、彼はそれを「自然人」の墮落であるとしておおいに遺憾とした。これにたいし、コンスタンはそれは人間にとり必然的であり、それを免れることはできないと考えた。また、他者への依存のほうが個人的な利害よりも強力であるとも考えていた。

個人の愛情の自由と国家にたいする個人の自由との関係は、コンスタンの内部ではどのように把握されていたのであろうか。コンスタンは同じく自由という言葉が使用されていても、両者はまったくの別ものであると考えていた。それどころか、個人レベルでの「自由」とはコンスタンにとってしばしば孤独や孤立の異名だった。彼にとってそれは人生の目的になるものではなかった。そして、一人で森をさまよう「自然人」を想定したとあって、先輩の哲学者たちを非難した。もしそのような「自然人」がいたとしたら、彼らはどのようにしてそこを抜け出して社会を形成したか説明がつかないというのである。社会で暮らそうという思考そのものにすでに社会が包含されている、と彼は主張している。「人間は弱いから社会をつくったのではない、元々社会的にできているから社会的なのだ」という彼の言葉がそれを明確に

説明していよう。

真と善

道徳について考える場合、個人がそこに所属し、また個人に所属する共同体を考えるだけで十分である、とコンスタンは考えた。その点で彼の思想はルソーによって代表されるユマニストの直系の弟子である、と著者トドロフ氏は考えている。この思想は純粹に人間的なものであり、宗教や信仰を必要とはしない。この道は物質主義的ニヒリズムからも宗教的な教条主義からも同じだけ隔たってはいるが、さればとって、この道が格段薔薇の花の咲き乱れる道であるわけでもない。人間は不完全なものであり、その感情は変わりやすく不安定であり、愛はしばしば永続的な幸福よりも失敗や諦念で終わることがある。しかしそうであっても、人はこの道を行くしかないというのがコンスタンの覚悟だった。

コンスタンの世界観は相互に還元不能の二つの局面から成り立っていた。一つは客観的世界であり、後者はそこに生きる主体としての人間の世界である。前者は科学という観点であり、その目的は真理である。後者は道徳という観点で、その目的は真ではなく善である。そして、両者は対等ではあるけれども、厳密に人間という観点から比較した場合、彼にとっては道徳のほうがより重要だった。そして、コンスタンの道徳は人間を「世界の中心」に据えたものである。

真理を述べることがつねに正しいことであるか否かに関する彼と哲学者カントとの応酬は、この点できわめて興味深い。理論的にはつねに真理を語るべきだというカントの主張にたいし、コンスタンは真理を語る事が正しいのは人が社会で他者と協調関係にある場合だけであり、カントが例として挙げた殺人者に追跡されている友人をかくまっているケースは戦争関係にある二つの国と同じであるから、「私は友人をかくまっている」などと追手に真実を告げる必要はないと主張した。彼にあつては社会という原理は真理に優

先し、友情に必要な場合には虚偽の陳述も正当化されるのである。

カントにとっては理論の整合性が重要であり、それが日常生活にいかなる結果を引き起こすかは関心の外にあったのかもしれない。しかし、コンスタンにとっては価値の序列はカントのそれとは異なっていた。彼には隣人への愛のほうが真理への愛よりも重要なのである。二人の個人の関係は科学の客観的な局面に属することではない。したがって、親密な間がらにおいては真実を語る義務は二義的な役割しか果たさない。誤謬の存在は有害であるが、既存の真理の押しつけもそれに劣らず有害である。「自由による誤謬は強制された真理に勝る」。コンスタンにとり、自由の真の長所はそれがあらゆる意見の検討やあらゆる議論の継続を許容する点にあった。

こうした理由からコンスタンは同時代の哲学者たち（フィヒテ、シュリング、シュレーゲル兄弟などを考えていたようだ）にたいしても、カントにたいしてと同様、批判的だった。哲学者たちは真理を探究することで人類に奉仕するのだと主張していたけれども、コンスタンには彼らがあまりにも教条主義的であるように見えたからである。同じ理由から彼はフランス人たちの会話の進め方にも同意できない点を見出していた。フランス人が才気をひけらかすことに重きを置くあまり、真理を追究したり、他人にたいする配慮に欠けるところがあるように彼には思われた。

著者にとって、コンスタンは終生自由を求めつづけた人である。自由の擁護に彼ほど貢献した人はいない、とまでトドロフ氏はコンスタンを絶賛している。しかし、それでいながらコンスタンの信念には絶えず疑いがつきまとして彼を苦しめたし、とりわけ愛情関係においては変わりやすく、心の静けさよりも苦しみにつきまといわれることが多かったのも確かだった。彼を他の人々から隔てるのは、自らの生きている世界を理解したいという欲求、自己にたいする例外的な明晰さ、自らを語る勇氣、およびそれに付随する雄弁さである、と著者は考えている。そして、最後にコンスタンを一つの文章で要約するものとして書簡中の彼自身の言葉を挙げている。

「私にはいつでも一つの言葉、一つの眼差し、一つの握手のほうがありと

あらゆる理性よりも、地上のあらゆる王冠よりも好ましいものに思われた。」

筆者にとってコンスタンという作家は学生時代に『アドルフ』を読んだことがあるだけで、どちらかといえば馴染みの薄い作家だった。そうした人間にとっても、本書はこの作家にたいする興味をおおいにかきたてる魅力をもっている。何も知らないまま、なんとなくもっていたコンスタンへの不信の念をこの書物は相当程度解いてくれたと思う。しかし、この書物がコンスタン研究のなかでどのような位置を占めるのか、また占めるべきなのかは筆者の能力を超えている。そうした学問的評価の問題は別として、本書はフランス文学や思想に関心ある読者にとってはもちろん、一般の読書人にも興味深い著作であると思われる。